

東アジアのムスリム移動者のトランスナショナルな家族とハラール食品消費行動

早稲田大学 小島 宏

はじめに

以前の拙稿(小島 2013)では個票データに比較可能なロジット・モデルを適用し、在日・在韓・在台のムスリム(男性)におけるハラール食品行動の関連要因を比較分析し、西欧の既存研究から予想された通り、宗教的アイデンティティの比較的大きな影響を見いだした。しかし、最近の滞日ムスリム留学生調査(2013~14年)個票データの分析で世帯構成の影響を分析したところ(小島 2014)、ハラール食品消費に対して現在の世帯構成だけでなく、実家の世帯構成が比較的大きな影響を及ぼしていることが見いだされた。これは留学生の特殊性による可能性もあるが、宗教アイデンティティ・食習慣に対する定家族の影響等も考えられるので、本研究では東アジア3か国のムスリム移動者における実家・現在の世帯構成の影響を検討する。

データ・分析方法

本研究は2005~2006年に早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室(店田廣文教授)により関東大都市圏において実施された「在日ムスリム調査」の個票データ(149ケース)、2010年に漢陽大学文化属性研究所(李熙秀教授)によりソウル大都市圏において実施された「在韓ムスリム調査」の個票データ(148ケース)、2012~2013年に台北において国立台北大学社会学科(郭文般准教授)により実施された「在台ムスリム調査」(367ケース)の個票データにロジット分析の手法を適用し、在日・在韓・在台ムスリム移動者によるハラール食品行動に対する実家と現在の世帯構成の影響を明らかにするため、小島(2013)で用いたロジット・モデルを修正して予備的分析を行った。従属変数としてはQ20のハラール食品店・ハラールレストランの利用頻度に関する質問に対する回答に基づくカテゴリー変数を用い、独立変数としては配偶関係、実家での各種家族成員の有無、現在同居の各種家族成員の有無に関するダミー変数を用いた。また、コントロール変数としては年齢、入国時期(各国の区分が異なる)、出身国、学歴、従業上の地位、住宅、信仰心変化、規範遵守、心配事(習慣・食べ物)適応に関するダミー変数を用いた。

分析結果

ハラール食品店利用頻度に対して、在日ムスリムでは実家にその他世帯員がいることが正の効果をもち、一人暮らしであることが負の効果をもち、在韓ムスリムでは実家に祖父母・配偶者がいることが正の効果をもち、父親がいることが負の効果をもつが、在台ムスリムでは有意な効果をもつ世帯構成変数がない。ハラールレストラン利用頻度に対して、在日ムスリムでは実家に祖父母がいることとその他世帯員と同居していることが正の効果をもち、在韓ムスリムでは有意な効果をもつ世帯構成変数がないが、在台ムスリムでは同国人との結婚が負の効果をもち、実家に配偶者がいることが正の効果をもつ。

おわりに

在日・在韓・在台のムスリム男性移動者において共通するような有意な効果をもつ独立変数はないが、滞日ムスリム留学生調査の分析結果でみられたような実家での祖父母の存在の影響(方向は異なる場合がある)、男女のキョウダイの存在の影響の方向の違いのほか、韓国では父母それぞれの存在の影響の方向の違いまで見られた。定家族での社会化を通じた宗教アイデンティティ・食習慣への影響も考えられるが、性別役割分業、経済力、出生順位別移動性向等を通じた影響も考えられるので、交差項の導入等によって分析を深める予定である。また、各国間の違いは各国におけるムスリム人口の属性別構成やハラール食品利用可能性の違いによるところもあろう。

参考文献

- 小島宏(2013)「日本・韓国・台湾のムスリム移動者におけるハラール食品消費行動の関連要因」『早稲田社会科学総合研究』, 第14巻, 第1号, pp.1-22.
 小島宏(2014)「滞日ムスリム留学生における世帯構成とハラール食品消費行動」日本家族社会学会第24回大会(2014年9月6~7日、東京女子大学)報告要旨。